様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　５　月　１９　日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2009　～　2012
課題番号：２１２４２０２７
研究課題名（和文）
琉球列島先史時代後半期における生業と交易にかんする実証的研究
研究課題名（英文）
Studies on subsistence and exchange in the latter half of prehistoric Ryukyus
研究代表者
木下　尚子（KINOSHITA　NAOKO）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：70169910

研究成果の概要（和文）：
本研究は伊江島ナガラ原東貝塚の８回の発掘調査をもとに、沖縄貝塚時代中頃の変化を伊江島において明らかにした。すなわち、遺跡の時期が５世紀から７世紀であること、この時期の沖縄諸島の土器は伝統的な形状を大きく変化させるがその変化は内在的なものであると同時に南九州や奄美地域の影響によって生じたこと、遺跡が南九州や種子島と貝殻を交易するために断続的に使われたキャンプ地であった可能性の高いことを明らかにした。
研究成果の概要（英文）：
Thorough 8 times excavations of Nagarabaru-higashi site on Iejima island in Ryukyu archipelago, we made clear the following matter from the viewpoint in what way the former culture of shell-mound-age change to the latter one :1. the time of the site belongs to the 5th to 7th century, 2. during this time the shape of potteries change from a traditional style to a new one, this change caused independently but on the other hand relates to the culture of south-Kyushu and Amami islands which had come to Okinawa intermittently, 3. Nagarabaru-higashi site is very possibpe to be one of the camp site for the shell exchange between Iejima and south Kyushu and Tanegahima island.
交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2010 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2011 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2012 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
総　計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：　沖縄貝塚時代後期・ナガラ原東貝塚・５世紀～７世紀・琉球列島・伊江島
貝交易・大当原式土器・アカジャンガー式土器

１．研究開始当初の背景

沖縄貝塚時代後期（弥生時代併行期から平安時代併行期。以下、貝塚後期とする。）は、沖縄諸島の人々がサンゴ礁資源を活用して地域色ゆたかな文化を形成した時期である。貝塚人たちは海岸砂丘に集落をつくり、採集と漁労に基礎を置く生活を続けたが、その最

後の時期に農耕を受け入れたことから社会に大きな変化がおこり、11～12 世紀に沖縄諸島の社会は農業に依拠した階級社会へと大きく変貌する。この歴史過程は本土地域のそれと明らかに異なっており、沖縄の先史時代の重要な特徴となっている。本研究はこうした沖縄地域の先史時代の特性を貝塚時代後期において追求すべく開始したものである。この時期について解決すべき問題点は、貝塚時代後期の二つの歴史的評価、土器編年とこれに対応する絶対年代、古墳時代の貝交易の実態であり、これらについて実証的に追究するため、先史時代貝交易において重要な役割を果たしたと考えられる沖縄県伊江島を選び、保存状況の良好なナガラ原東貝塚を発掘調査の候補地とした。

２．研究の目的

以下を目的とした。

① 貝塚時代後期をめぐる二つの歴史的評価について実証的に追究する

② 貝塚時代後期の前半から後半への変化の実態を実証的に解明する

③ ５～７世紀の貝交易の実態を実証的に解明する

以下個別に説明する。

貝塚後期の歴史的評価をめぐって、現在二つの考えが提示されている。一つは、貝塚後期を食糧がサンゴ礁資源に保証された安定した時期と捉える考えであり、他方は島ゆえの限界による食糧不足が顕在化した不安定な時期とみる考えである。前者は遺跡の多い貝塚時代前期に対応して考古学的視点から指摘されることが多く、後者はおもに貝塚時代後半期に対応して人類学的立場で指摘されている。ことに後者は、貝塚後期文化への一面的な見方に警鐘をならす意味をもち、考古学からの検討が望まれている。貝塚後期の研究には、こうした問題を共有しつつ綿密な事実を積み重ねてゆくことが何より重要である。発掘調査を通してこの問題の解決に寄与したいというのが、研究の第一の目的である。

貝塚時代の人々の食生活を支えた煮沸用具は、貝塚時代の前半と後半で大きく形を変える。すなわち前半期の底部が尖る形状のものから後半期の平たい形状のものに変化する。調理用具の形の変化は、食生活の変化と表裏をなしているとみられるため、この変化の意味は重要である。ナガラ原東貝塚は貝塚後期中頃の遺跡で、貝塚後期の前半から後半に移行する時期に相当する。この変化が具体的にどのように起こったのかを土器の分析を通して明らかにし、これに対応する編年とその絶対年代を提示することが、研究の第二の目的である。

ナガラ原東貝塚（Ⅴ層～Ⅲ層）が存在した 5 世紀から７世紀は、種子島では広田遺跡の文化がその後半を迎えて存続し、九州では古墳時代中期から後期の文化が展開した時期である。種子島においても九州においてもサンゴ礁域の貝殻（ゴホウラ、大型イモガイ）が消費されており、これらの地域との往来が継続していたとみられる。その実態を、弥生時代併行期以降九州・種子島地域と関わりの深い伊江島で把握したいというのが、今回三番目に目指すところである。

３．研究の方法

（１） 伊江島ナガラ原東貝塚の発掘調査を実施し、包含層を地山まで掘り下げる。

（２） 共同研究者を以下の班に組織し、総合的な研究を行う。

① 発掘調査班：現場作業を進め年次報告書を作成する。

② 土器研究班：編年作業を進める。

③ 貝交易班：出土貝製品を検討し、種子島ならびに南九州との交易関係

を追究する。

④ 自然科学分析班：堆積学的分析、プラント・オパール分析、土器の胎土分析、脊椎動物遺体の分析、植物遺体の分析、貝類遺体の分析を行う。

（3） 研究会の成果を報告書にまとめ、刊行する。

８次分の発掘調査の成果を集成し、総合的な報告書にまとめる。

４．研究成果

（1）成果の要約と展望

① ナガラ原東貝塚が目的的に形成された遺跡であったことを明らかにした。

② 貝塚時代後期がフード・ストレス期とは必ずしもいえないことを、遺跡の分析を通して示した。

③ 貝塚時代前半から後半への大きな変化が内在的なものであることを実証的に示した。

④ 古墳時代貝交易の南島側の実態を、遺跡を通して初めて具体的に明らかにした。

本研究の成果は、古墳時代貝交易研究ならびに南島考古学の貝塚時代後期の土器編年研究上の未解決の問題に一つの回答を提示した。今後この提案と事実を基礎に、南島考古学ならびに古墳時代貝交易研究において研究の進展があると予想される。

（2）成果の説明

① ナガラ原東貝塚は、大当原式期からアカジャンガー式期において、人々が一定期間の居住をくり返すことで形成された生活址である。本遺跡は交易にかかわる多彩な遺物で特徴づけられる一方で、土器・石器など日常の基本的道具の多くが島外産であり、具志原貝塚などと比べて小規模である。これらのことからみて、本遺跡は、島外との交易を含めた何らかの目的のために断続的に営まれた居住地であった可能性が高い。

② 貝塚後期に対応するⅤ層からⅢ層までの自然環境は安定していたとみられ、主要な貝類の大きさも一律に小型化することはないが、生業の重心は狩猟から漁労や植物加工にうつる傾向が認められ、クガニイシ形石器をつかった伝統的食生活が継続する。こうした状況は、高宮広土氏の説くフード・ストレスの状況に対応しない面をもつ。

① 大当原式土器からアカジャンガー式土器への変化は、Ⅴ層からⅢ層にかけて段階的かつ明確であり、Ⅳ層がアカジャンガー式土器の成立期に対応すると理解された。この変化はきわめて連続的であり、伝統的要素が持続する点で特徴的である。その変化を促した要因として、Ⅴ層に存在する奄美地域に特有な型式の土器（スセン當式土器）や、南九州の成川式土器の存在を考慮する必要がある。

② Ⅴ層からⅢ層において、スイショウガイ科貝類の粗加工品や貝符、オオツタノハ製品、鉄製刀子、南九州や奄美との関係を示す土器が認められ、伊江島が貝殻の提供を介して種子島や南九州と継続的に関わっていたことが理解された。遺物をみる限り、伊江島と種子島の関係は直接的であるのに対し、九州との関係は間接的である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）

① 木下尚子 2012「琉球列島における先史文化の形成と人の移動―島嶼間の人文地理

的関係に注目して―」『文学部論叢』第103号、査読有、熊本大学文学部、pp.13～27

② 木下尚子2010「先史奄美のヤコウガイ消費－ヤコウガイ大量出土遺跡の理解にむけて」『文学部論叢』査読有、第101号、熊本大学文学部、pp.35～55

〔学会発表〕（計１　件）

① 木下尚子“Marine environment and culture in the Prehistoric Ryūkyūs”、馬祖列島與海洋環境文化国際研討会、2011年10月29～30日、中華民国、台北市

〔図書〕（計17　件）

① 木下尚子編2013『ナガラ原東貝塚の研究』平成21～24年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書、熊本大学文学部、１-390頁

② 宮城弘樹・安座間充2013「沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、231-247頁

③ 新里貴之2013「ナガラ原東貝塚出土のスセン當式類似土器について」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、248-258頁

④ 中村直子2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、248-258頁

⑤ 岸本義彦・神谷厚昭2013「石器等から見たナガラ原東貝塚の様相－石器・石材の供給地推定－」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、269-277頁

⑥ 山野ケン陽次郎2013「ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、278-294頁

⑦ 中村友昭2013「古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ腹面釧の流通について」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、295-308頁

⑧ 川口陽子2013「ナガラ原東貝塚出土ゴホウラ背面貝輪片について」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、309-316頁

⑨ 高宮広土2013「南島中部圏先史時代遺跡出土の植物遺体」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、317-325頁

⑩ 樋泉岳二2013「脊椎動物遺体からみたナガラ原東貝塚における古環境と動物資源利用」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、326-330頁

⑪ 石丸恵利子・村田知聖2013「ナガラ原東貝塚における動物資源の調理と廃棄」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、331-339頁

⑫ 黒住耐二2013「ナガラ原東貝塚の貝類遺体」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、340-362頁

⑬ 盛本　勲2013「伊江島における伝統的漁撈技術と考古資料の比較検討」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、363-376頁

⑭ 松田順一郎2013「ナガラ原東貝塚の堆積物」『ナガラ原東貝塚の研究』、熊本大学文学部、377-381頁

⑮ 木下尚子監修 2012「ナガラ原東貝塚 8」『考古学研究室報告』第47集　熊本大学考古学研究、１-62頁

⑯ 木下尚子監修2011「ナガラ原東貝塚7」『考古学研究室報告』第46集　熊本大学考古学研究室、１-63頁

⑰ 木下尚子監修2010「ナガラ原東貝塚6」『考古学研究室報告』第45集　熊本大学

考古学研究室、１-64 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
木下　尚子（KINOSHITA　NAOKO）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：70169910

(3)連携研究者
黒住　耐二（KUROZUMI　TAIJI）
千葉県立中央博物館・上席研究員
研究者番号：80250140

新里　貴之（SHINZATO　TAKAYUKI）
鹿児島大学・埋蔵文化財調査センター・助教
研究者番号：40325759

高宮　広土（TAKAMIYA　HIROTO）
札幌大学・文化学部・教授
研究者番号：40258752

中村直子（NAKAMURA　NAOKO）
鹿児島大学・埋蔵文化財調査センター・准教授
研究者番号：00227919

(4) 研究協力者
安座間　充（AZAMA　MITSURU）
沖縄県金武町教育委員会・係長
研究者番号：なし

石丸　恵利子（ISHIMARU　ERIKO）
熊本大学・埋蔵文化財調査センター・調査員
研究者番号：50510286

鐘ヶ江賢二（KANEGAE KENJI）
鹿児島国際大学・学芸員課程助手
研究者番号：なし

神谷　厚昭（KAMIYA　KOSHO）
金城町石畳地質研究所・所長
研究者番号：なし

川口　陽子（KAWAGUCHI　YOKO）
筑紫野市教育委員会・主査
研究者番号：なし

岸本義彦（KISHIMOTO　YOSHIHIKO）
沖縄石器研究会・会長
研究者番号：なし

新里亮人（SHINZATO　AKITO）
伊仙町教育委員会・学芸員
研究者番号：なし

樋泉　岳二（TOIZUMI　TAKEJI）
早稲田大学教育・総合科学学術院・講師
研究者番号なし

中村友昭（NAKAMURA　TOMOAKI）
鹿児島市立ふるさと考古歴史館・学芸員
研究者番号：なし

松田順一郎（MATSUDA　JYUNICHIRO）
史跡鴻池新田会所管理事務所・課長
研究者番号：なし

宮城弘樹（MIYAGAI　HIROKI）
名護市教育委員会・主査
研究者番号：なし

盛本　勲（MORIMOTO　ISAO）
沖縄県教育庁・課長
研究者番号：なし

山崎純男（YAMASAKI　SUMIO）、
高麗大学校・考古環境研究所・特任研究員
研究者番号：なし

山野ケン陽次郎（YAMANO　KEN　YOJIRO）
鹿児島大学・特別研究員
研究者番号：10711997